

## 卷頭言

「アクティブ・ラーニング」に思う  
～昔も今も変わらぬもの～

県教育庁教育振興部指導課 指導主事 鈴木 洋松

暑かった今年の夏、一冊の古本を偶然見つけた。タイトルは『創造性を追求する 学校経営の実践』。発行は昭和43年で、著者は山地英太郎。当時、東京都教育庁指導部指導第三課長を務めていた方である。小学校の教師をしていた私の祖父は、5年前に亡くなったのだが、大の読書好きであった。残された大量の本はほとんど処分したのだが、どういうわけか残っていたのがこの本である。手にとりページをめくってみると、『算数の学習指導法について』ということが書かれていた。少し長くなるが、非常に参考になったので、その一部を紹介する。

- 指導のねらいが指導案に示されていても、教師がその意味をはっきりとらえていないと、正しい意味での考え方を伸ばすことができない。
- 学習のねらいや発問が子どもに理解されないと、子どもは見通しが立たず、自分から積極的に考えることができない。
- 教師が教えなければならないところと、子どもに考えさせるところを区別して指導しないと、子どもに考えさせる時間がなくなり、考えさせることができなくなったりする。
- もとになることを、単に形式的なことばでおぼえさせても、その真意をつかませ、実際に操作できるようにしておかないと、子どもは自分で学習を進めることができない。
- 子どもの直感を生かして作業させないと、教師の意図にそって考えることが難しくなる。
- 子どもの答えの意味を、教師が正しくとらえて導かないと、子どもの考えを伸ばすことができない。
- 教師が子どもの発言を最後まで聞いてやらないと、子どもの思考や発表力を伸ばすことができない。

この本が発行されてから半世紀。その間、学習指導要領の改訂は繰り返され、そして現在は次期学習指導要領改訂への動きが加速している。その次期改訂のキーワードと言われているのが「アクティブ・ラーニング」である。いまさら説明するまでもないが、「アクティブ・ラーニング」とは、「課題の発見と解決に向けて主体的・協同的に学ぶ学習」のことである。発表やグループ学習を通して子どもが「アクティブ」に学習活動を行うのも「アクティブ・ラーニング」であるが、より大切なことは（おそらく数学の授業では特に）、それらの活動に加え、授業の様々な場面で、子どもが「アクティブ」に思考する場面を教師が作り出していくことではないだろうか。このことは、冒頭で紹介した古本でも繰り返し述べられていることである。

昔も今も変わらず、学びの主役は常に“子ども”にあるということを、この夏改めて思い知らされた。

終わりに、数学部会の事務局及び会員の皆様による、数学教育の改善・充実に向けた熱意ある取組に感謝するとともに、数学部会誌「 $\alpha - \omega$ 」が一層充実・発展し、今後とも多くの先生方の研修の一助となり、日々の実践に活用されることを祈念いたしております